Ⅱ．話し合いのまとめ

※グループでの話し合いは〔資料Ａ〕の進め方をし、基本的には「＊ふりかえる基本的な観点①～⑥」に沿って話を進めましたが、それぞれ各グループでの話し合いの進行結果やそのまとめ方に沿って掲載しています。

（１）Ａグループ　くにたちブッククラブ（文学講座）
（担当委員　鈴木直文、三好紀子、和智裕貴）

◎: 職員のことば　　＊: 市民のことば

① 公民館事業全体の中の位置づけ
「社会を見つめ、文化をつくる」

② なぜ、この講座をおこなったか　（目的・経緯）
◎1977 年から 40 年継続している「共同で本を読む」講座。１つの作品の読みを深め、心の豊かさを養う。性別・年代・社会的背景を越えて集うことで楽しめる時間を共有する。

＊職員が参加者と話をして方針を決めスタートした。市民が主体的に参加する形がずっと継続して今に至っている。
＊一橋大学の学生たちがリヤカーで本を自力で集めて公民館に図書室を作った歴史がある。（国立市図書館より早く公民館図書室ができた。）

③ どんな講座だったのか　（内容・展開）
◎夜７時半から始まる講座は、現役世代や高校生など学生も参加できるように設定されている。
◎年８回の講座の最後に職員と参加できる人で「ふりかえる会」、課題図書選定の会（講師も入る）、文集づくり。市民と職員が意見交換をして決めていく。
◎前半１時間は参加者からの感想発表。後半は講師の解説を聞く。

＊「社交としての批評の場」－　若者も高齢者もその人の人生経験をもって感想を出し合う、優れた社交の場である。
＊読みっぱなしにしない、選書から文集を編むまで職員と市民が一緒になって取り組むのは、公民館が「共同で読む」ことを市民の学習として位置付けているから。
＊職員がシステムを作ったというだけでなく、歴代の職員が普段から参加者に一歩踏

み込んでかかわってきた。その時々の内容へのコミットの仕方が職員の実力だ。
＊小説を読むということは日常生活では見えないことを読む練習の場だ。1 人では読まない本を読んで世界を広げ、自分の知らない世界に寛容になることができる。
＊モヤモヤしたものを言葉にしてくれる市民や講師がいる。
＊社会科学のアプローチとは違う、小説を通じて個人と社会の接点を見つめ、問題を読み解いていく方法で、小説は社会を見つめている。

④ どんな成果や学びにつなげられたか
◎自分が好きでない作品、題材に取り組むことで自分が好きでないものを評価する人がいることを知ること。変わった意見を言う人がいる。公民館の基本は他者を尊重すること。それは自分が尊重されることでもあるから。

＊過去―現在―未来をつなぐ“場”として、ブッククラブが引き継がれてきた。
死去や老いて来られなくなった人の言葉が文集に残っているから読むことができる。
年度末の「文集を編む」作業は、自分がいない未来の人と繋がろうとする試みである。
＊月 1 回の作品の批評を通じて作られた市民同士の繋がりが、講座の時間を離れても緩やかにお互いを気遣いあう関係性を作っている。
＊人が入れ替わってもブッククラブという「場」が引き継がれてきたのは職員と市民の協働の成果である。
＊この場がコミュニティであり、人をつなぐ場であることに、いかに意識的であるかが職員に求められている。
＊参加者にとって時間制限の中で自分の読みを出すのは大きなプレッシャー、時間内で発表する力をつける必要がある。
＊講師の指摘で読みが深まる。一方で参加者の人生経験に裏打ちされた意見は重みがある。講師も学ぶことがあるだろう。

⑤ 今後の課題や大切にしたいこと
◎幅広い年代の参加者にきてもらうことで、異なる視点からの感想や意見が出て互いのやりとりが面白くなり充実感が得られるのはないか。また参加者同士のつながりも広がっていく。

＊長く継続して参加している人の読みの確かさ、水準の高さは新規参加の壁を高くしていないか。学びの水準を高く保ちながら、どうすればより広い層に場を開けるか。
＊若者・子育て世代・しょうがい者などが長く続くためには？
＊新規参加者に声をかけ継続できるよう働きかけることが大事。
＊ブッククラブの活動を知って面白いと思った。もっと知ってもらうにはどうするか。

＊選書は大事だ。

自分の読みが貧弱なのか、作品が貧弱になっているのか、時代が自分に合わなくなっているのか、感心した作品がなかった。そこで名作といわれるものを希望図書として出した。

選書で幅広い読者層に響くものを考える。過去の選書歴にこだわらず名作は何度も読んでもいい。

日ごろから職員が市民とどうかかわっているかが選書作業の質を高める。

＊開始時間を早める。講師も参加者もお茶会に出やすくなる。

2 時間の講座では話し足りない。終了後のお茶会で市民同士、職員とも話が深まる。こうした読書会以外の時間もブッククラブを支えている。

⑥　みなさんとふりかえって考えたいこと

◎毎年 30 人の申し込みに対して 20 人くらいの参加者。継続して参加してもらうにはどうずればよいか

＊初回は歓迎会を兼ねることで新規参加者が定着しやすくなる。

＊講師を呼ばない回を作り、参加者同士で話す時間を確保する。

＊選書の際に広い読者層に響くものを選ぶ。名作は何度読んでもいいのでは？

＊開始時間を 19 : 00 にしてはどうか。若い世代が参加しやすく、講師も講座終了後参加者とお茶会に行きやすい。一方都心から帰宅する人にとっては 30 分早めても変わらないという意見もあった。

A グループ :「くにたちブッククラブ」

1.はじめに

ここでは「くにたちブッククラブ」とはどんな事業で、参加者や市民にとってどんな意義や意味を持つものなのかを、グループディスカッションの内容をもとに検討する。

以下では、まず 40 年継続して来たことの意義について触れる（2. 過去ー現在ー未来をつなぐ“場”としてのブッククラブ ）。それに続いて、現在の参加者が感じている活動の場の意義（3. 「社交としての批評」の場）と、そこで培われた繋がりが日常に派生する側面（4. 日常の助け合いへ ）に焦点を当てる。その後、そうした意義のある場を維持するための職員の重要性（5. 職員の役割 ）、またより多くの人が享受できる場にしていくことの必要性（6. 開かれた場づくりへ）に言及する。最後にディスカッション参加者から出された課題とそれに対する解決策の案を提示する（7. 新しい枠組みの可能性)。

2.過去－現在－未来をつなぐ“場”としてのブッククラブ

くにたちブッククラブ（以下、ブッククラブと略す）は、1977 年にはじまり、昨年 40 周年を迎えた。40 年継続されてきた主催事業という特異性に、はじめに参加者の議論が集まった。

小説のテーマは毎回異なるので、ブッククラブは特定のテーマについて継続して考え続けているグループではない。それでも「共同で読む」ということを続けてきた。そこから生まれる何かを、過去から現在、そして未来に繋いでいるのがブッククラブなのではないか。

「おそらく公民館の講座でこれだけ長い連続性のある講座がこれまであったかな、というところがまず一つなんですね。(中略) 77 年当時の人はもう既にいないわけです。だけれども、この方々の言葉というのはやっぱりちゃんと残っているんですね。それを引き継ぎながら、その場に参加するということ自体がすごく大きな意味を持ってくるんじゃないか」（元担当職員）

ブッククラブでは毎年度末に、文集の編集を行なっている。この「文集を編む」作業は、今の時間を共有していない過去や未来の参加者と繋がろうとする機会でもある。

「文集を編むのは今は自分がいるための作業をやっているんだけど、自分のいない、いなかった時間と、自分がもう死んじゃっていない時間のためにやっている。今編んでおけば４０年後の人も読むかもしれないということをいつも思って、(文集編集作業を行う)３月はあり

がたいなといつも思っています」（ブッククラブ参加者 A）

ブッククラブの場づくりは、ずっと以前に「本を読みたい」と自力で本を集めて公民館に図書室をつくった市民たちの想いを引き継いでいるのではないか、という意見も出された。

「(国立公民館には)小さいながらも確実に蔵書を揃えていくという図書室がある。国立市立図書館より早い段階で図書室ができているという歴史がある。土曜会という一橋大学の学生さんたちがリヤカーを持って本を集めたんですね。図書室を作りたいという思いで、本はありませんかと集めて回ったという歴史があるんですよ。それがここの図書室の成り立ちの一つで」（ブッククラブ参加者 B）

こうして時間とともに人が入れ替わってもブッククラブという「場」が引き継がれてきたことが、この事業の一番の価値ということかもしれない。

3.「社交としての批評」の場

ではこうして引き継がれてきたブッククラブとは、どんな「場」なのだろう。ひとつめの顔は「社交としての批評」の場である。

「丸谷才一が批評とか評論というのは社交だって書いているんですよ。私も本当にそうだなとブッククラブに来て思うのは、高校生なら高校生なりに、70、80 代の方とかはそれなりの人生経験とかがあって、それを持って同じ作品を読んで感想を出し合う。本当にすごい社交だなと思うんです」(ブッククラブ参加者 A)

そうして集まった他の参加者との意見交換を通じて、一人で読むのでは気づけない新しい発見があるのだという。今年はじめて講座に参加した方は、普段は社会科学や哲学の本を読むことが多かったという。ブッククラブに参加してみると、小説を通じても社会を読み解くことができることに気づくことができたそうだ。

「今年はじめて講座に参加させていただいて、その前まで小説らしい小説を読んだことがありませんでした。問題や物事を小説の中で捉えながら、それも社会の大きな流れの中で、個人と社会との接点を見つめながら解いてゆくというか、そういう方法で小説は社会を見つめているんだなというのが、だんだんわかって来ました。」(ブッククラブ参加者 C)

参加者は、普段自分ひとりなら手に取らない作品を読んで世界を広げることも、ブッククラブの意義だと捉えている。「小説を読むことは日常の生活ではみえないことを読む練習」

(ブッククラブ参加者 D)なのである。

「(ある作品がとても嫌だった参加者が) こんな作品を取り上げるブッククラブにはもう来ないって言ったとか。でも自分の範疇には絶対ないようなものが取り上げられるときもあって、もうちょっと寛容に、世の中にはこういうのもあるかもしれないっていうのがあるといいなって私は思うんです」(ブッククラブ参加者 A)

4.日常の助け合いへ

文学作品の批評を通じて作られた市民同士の繋がりは、講座の時間を離れても緩やかにお互いを気遣い合う関係性にもなっているという。

「(ブッククラブに)来ている人と、その場だけ月一ですけれども知り合いになる。知り合いになったその人が過度に気になるみたいなことってありますよね。私も実際そうなんですね。あの人、どうしているかななんて思ったりするわけですよ。それは月一会うっていう連続がなければ、なかなか思えないことでもあったりして。ある種ここがコミュニティであり、いわゆる人をつなぐ場であるというのは言えるのかなと思います。」(ブッククラブ参加者 B)

他の参加者も、東日本大震災のとき、一人暮らしのメンバーの安否が気になって、迷いながらも様子を伺いにいったという。ブッククラブという「場」は、日常の市民同士の助け合いにも繋がっている。

5.職員の役割

市民同士がつながり合う「場」としてのブッククラブを、公民館主催事業として繋いで来たのは歴代の担当職員である。参加者たちも歴代の職員が重要な役割を果たして来たことをよく理解している。

「読みっぱなしじゃなくて文集を編むというところまでやるというのは、公民館がちゃんと学習として位置付けているからだなと思うんです。これは市民だけでは絶対にできない」(ブッククラブ参加者 A)

「職員だったら、かつての和田さんの力が大きいですよ。ずっと何十年も続いた基礎づけをしたというか。参加者と最初に話をして方針をまとめるって、他の講座であまりやらないやり方でしょう。だからずっと継続して来た。普通だったら、やっぱりどうしたって講師が責

任者ぶって、参加者がそれを拝聴するということにどうしても傾きがちになるでしょう。それが、参加者が主体的に参加するような講座のあり方がずっと続いているって、結構大きいですよ」(ブッククラブ参加者 D)

その分、現在の職員への期待も大きい。ブッククラブの学びの質を高めるためにも、そこに集まる人々がつながり合うためにも、職員の役割が大切だという意見が多く出された。

「(職員の役割が大事なのは) システムをつくったということだけじゃなくて、その時々の内容へのコミットの仕方が、職員の人たちの実力なんじゃないかなと思います。(選書は) 職員の方、先生も交えてやるんだけど、そのときの話し合いだけじゃなくて、普段から職員の方がもっと参加している人に一歩踏み込んでかかわるということが大事かなって」(ブッククラブ参加者 A)

「みなさんもちろん顔を見て話しているんですけど、講座中は (3分というプレッシャーの中で自分の読みを話す)、講師から解説を伺って、もっと言いたいことがあるんだけれど2時間という都合上語り足りないっていうのもあって、職員の和田さん、田島さんの時代からですけど、終わってからお茶の時間に行くんですよ。そこでお互いの素性がわかるというか、腹の内がわかるというようなものがあって、講座に付随したもろもろのことが結構いろいろなものを生んでいるという、確かにそうなんですよ」(ブッククラブ参加者 B)

「(ブッククラブが人をつなぐ場であるということに)いかに意識的であるかというのも職員に求められるものかな」(ブッククラブ参加者 B)

これらの発言から、主催事業でありながら参加者が主体になるスタイルで 40 年継続してきたブッククラブだからこその、強いオーナーシップの意識が感じられる。現担当職員は求められる役割をよく自覚しているが、業務の忙しさや新規参加者に過度なプレッシャーをかけないようにという配慮などから、なかなか働きかけができないのだという。

「新しく来た人に、終わった後に話しかけてフォローしたいなと思うんですけど、やっぱり最後バタバタしちゃうことが多くて、話しかけられずにもういつの間にか帰っちゃったみたいなパターンが多くて、いつも反省しています」(現担当職員)

「(図書室月報の執筆を依頼してはどうかという提案に対して)1 回目に来て、いきなりもう書けと言われたら来なくなるんじゃないかと思って、声をかけないようにしているんです。書くことが好きなの方なのかどうかもわからないので」(現担当職員)

終了後に市民の有志がいくお茶会に、職員にも参加してほしいという意見もあったが、夜の時間帯の講座であるため、それはなかなか難しいだろう。

6.開かれた場づくりへ

常連の参加者たちが強いオーナーシップを持ってつくってきたブッククラブを、ある講師の先生が「秘密結社」と呼んだという。人生経験の豊富な参加者の感想は、時に専門家である講師もたじろぐような高度なものもあるという。

「皆の意見を聞いて、先生がタジタジになっている部分もやっぱりあるよね。時々、先生が、しまった、ちょっと自分の用意が不足だと感じていらっしゃるみたいだな、と思うことはあります。それだけ参加者のレベルも高いんですよ」(ブッククラブ参加者 E)

「結構、人生体験を交えた意見というのはすごい重みがあるんですね。(人生経験が豊富な人の話から)先生も学ぶべき所があると思います」(ブッククラブ参加者 F)

参加者の水準の高さは、同時に新規参加の障壁を高くしてしまっているのではないかという意見も交わされた。

「レベルが上がりすぎちゃって、高校生一回きりしか来ないということになっちゃうんです」(元担当職員)

「長く入っている人は秘密結社じゃない、いつでもオープンだというけれど、初めて来る人は入りにくいだろうなと思います」(ブッククラブ参加者 D)

学びの水準を高く保ちながら、どうやってより広い層の参加者に場を開いて行くかは、ブッククラブの大きな課題であるようだ。

7.新しい枠組みの可能性

ではこれからのブッククラブは、何を維持し、何を変えて行くことができるだろうか。今の参加者からは、現在のフォーマットはとても良いという意見が多かった。他方で、課題として挙げられたのは、

・参加者同士で話す時間がもっとほしいが、講座の時間内だと消化不良になることが多い
・選ばれる作品の質がよくなかったり、講師の専門とミスマッチだったりすることがある

·新しい参加者がなかなか定着せず、若者、子育て世代、障がいを持った人などが参加しにくい
·職員が積極的に参加者に働きかけて、選書の質をあげたり、新規参加者の定着を促せるのでは

ということだった。

提案された解決策は、以下の通り。

·職員に過度な負担を強いることになってはいけないので、8 回の講座の時間内で課題を解決する方がよい
·たとえば 8 回の講座を全て同じフォーマットで行うのではなく、初回は歓迎会を兼ねることで新規参加者を定着させる、講師を呼ばない回を作って参加者同士で話す時間を確保する、など、バリエーションを持たせるといいのではないか
·選書はすでに参加者の意見を取り入れているが、最終的には職員が講師と相談して選んでいるのが現状。それを最終回のふりかえりなどの機会に参加者自身が決定するようにしてはどうか。
·女性作家の作品を多くした時に参加者数がグッと増えたことがあった。選書の際に広い読者層に響くものを選べないか。たとえば、過去に一度読んだ作品はあまり選ばないことになっているが、名作は何度も読むという手もある。
·そもそもブッククラブの存在があまり知られていないようだ。知れば面白いと思えたので、もっと広く知ってもらうとよいのでは。
·開始時間を 19 時半から 19 時に早めてはどうか。そうすれば若い人や子育て世代も参加しやすく、講師や職員もお茶会に参加しやすくなるのでは。

8. まとめ

「くにたちブッククラブ」は、40 年継続されて来た稀少な事業であり、過去―現在―未来をつなぐ場として機能して来た。参加者がレベルの高い「社交としての批評」を展開しており、そこで形成された関係性は日常の助け合いにも生かされるようになっている。そうした場を継続的に提供していくために職員に求められることは多く、特に批評のレベルの高さを保ちながらより多くの市民の参加を促すような舵取りが期待されている。そのための具体的な改善策も多く提示された。

（２）Ｂグループ　ふれあいひろば（世代間交流事業）
（担当委員　川田幸生、鴇田美緒、古旗真幸、宮脇聡）

本まとめに関しては以下のような手続きのもと行なわれた。
１、ふりかえる会の書き起こし原稿(B グループ部分)に目を通し、どのような語りが生まれ、どのようなストーリーが読み取れるのか委員同士で検討した。
２、検討の中で、具体的な語りに対して印象的なフレーズや概要がわかるようなフレーズを即時的につけて(ラベリング)いった。
３、ラベリングしたものを①公民館事業全体の中の位置づけ、②なぜ、この講座をおこなったか（目的・経緯)、③どんな講座だったのか（内容・展開)、④どんな成果や学びにつなげられたか、⑤今後の課題や大切にしたいこと、⑥みなさんとふりかえって考えたいこと、の 6 項目に分類した。

① 公民館事業全体の中の位置づけ
さまざまな世代の方々との共生の地域社会を育む
具体的な語り：
・世代間というより、多世代という言葉を多く使うようにはなってきていると思うのですが、そういったところで、課題にもあったようなことを考えていければと思っています。

② なぜ、この講座をおこなったか（目的・経緯）
・これまで比較的高齢な方々を対象に講座をしてきた職員が、その世代の方々のもっている知恵を他世代に活かすことができないか考えたため。

・伝える側には市内で活動している団体やグループを想定した。

・日程については小学生が来やすいように夏休み、冬休み中またはその直前とした。

・対象として小学生を選んだ。保護者(若い世代)も公民館に興味をもってもらうため。
具体的な語り：
・公民館の事業の対象としては、学生というのはどう捉えられていますか。
・高齢者向けの講座が多いというわけではありません。ただ、一般的な、例えば誰でも事前申し込みなしで、直接来てくださいとしている図書室のつどいとかでも、実際に集まってくださる方は比較的、ご年配の方が多いというのは事実です。

・広報の方法：市内公立小学校全学年・全クラスにチラシ配布
具体的な語り：
・今回はターゲットになっているから、積極的にこういう広報を行なったという認識でいいのですか。それ以外の公民館でやっていることはあまり小学校に周知していないという認識でいいですか。
・数ある事業の中で、市内の公立小学校の全学年全クラスにチラシを配っているのは多分、この事業だけになります。校長会に事前に、こういったものを出させてくださいというお願いをさせていただいた後

に、全部のクラスの人数のリストをいただいて、全ての学校にお送りします。

・開催時期に関しては、試行錯誤して決定している。
具体的な語り：
・参加人数は夏でも冬でも、あまり変わらないと思います。冬だと、暗くなるのが早いので、終わりを３時にするなど工夫はしましたが、それほど大差はないというところでした。夏の場合も、夏休み入ってすぐなどはまだみんな田舎にも帰っていないので、いいのではないかと思いました。冬は、冬休みに入る直前あたりで、もうすぐお正月前という、あまりみんなが出かけないところを狙って、やらせてもらいました。

③　どんな講座だったのか？（内容・展開）
・一方的に子ども達が話を聞くという形ではなく、体験しながら交流できるプログラムになるよう考えた。

・複数のプログラムを準備することで未就学児や小学生の子どもたちの兄弟も参加できるようなものを考えた。

・スタンプラリー形式にしたことで参加者に複数の体験をしてもらえた。

・楽しめる体験だけではなく、学習的な要素もいれた。

・事業の最後には音楽的なものを入れた。

・回数を重ねるごとに企画への参加者の年齢層が変化。運営側の市民はその都度楽しさ、困難さを経験。
具体的な語り：
・ヘルマンハープで３回目のとき、冬休み直前というときにまたお話いただいたので、またそのくらいの年代かと思って、少し用意していったら、小さい子、幼稚園から小学校の２年生ぐらいまでの方で、もう少し易しい曲にすればよかったということもあったのですが、最初の前半はクリスマスも近かったので、クリスマスの曲などを聞いていただいて、間に体験してもらってという形でやりました。

・運営側の市民は当初、参加者の反応がいまいちだと思っていたが実際やってみたら予想に反した反応がでた(新しい気づき)
具体的な語り：
・小学校の高学年ぐらいまでの方がいらして、実際にやってみて、すごく覚えが早いのです。私たちと同じぐらいの年代の方にやり方をお教えするよりも頭が柔軟というか、よく覚えてくれて、楽しんでいただけたと思います。
・目をきらきらさせていました。つまらないのかなと思っていたのですが、新しいことを覚えるということは、すごく楽しいのかなと思いました。

④　どんな成果や学びにつなげられたか？

・経験がない状態から体験して楽しめる状態になる(教える側にとっても同世代だけの活動になりがちであったところが結果として多世代の交流となった)

具体的な語り:

・私たちが一人一人ついて、経験がなくても音は簡単に出て、曲になりました。上手になるには深いのですが、すぐにメロディーになるというのを体験していただきました。一番最初のときは小学校の中学年ぐらいまででしたが、皆さん、すごく楽しんでやっていただいて、みんなで最後に合奏ができるようになりました。

・実際に来ている年齢も未就学児や兄弟一緒が多い

具体的な語り

・実際に来ている年齢では、未就学児も４分の１以上は来ているのですが、幼稚園とか保育園にはチラシを配っていなくて、兄弟がいる弟や妹が一緒に来たりというのが多かったです。

・子どもが参加するイメージがない公民館。しかしイベント当日子どもが沢山集まった

具体的な語り：

・公民館という場があっても、子どもが出会う機会がある施設がありません。思い切って公民館で活動を始めようと思ったのですが、（中略）私たちのグループがやるといったときに、周りの反応というのがすごく冷たかったです。というのは、公民館というのは、子どもがそもそも参加するところではないという意識がとても強くて、学校の施設見学に行くくらいのもので、子どもが１人で公民館に行くようなところじゃないというのが、まず前提でした。だから、公民館でそんなことをしてもという意見がすごく強かったです。

　だから実際にやってみても、子どもはなかなか集まらなかったのですが、実際に公民館からこういう機会をいただいて、公民館全体が子どもで埋まった第１回のときは、感激してしまいました。「えっ、子どもたちが公民館に来てくれる？」それで、公民館のお話を聞くと、全学校に配付したとのこと。すごいことだなと思いました。とても考えられないです。全部の小学生にみんな、そのチラシが行くわけです。各家庭にも、そのチラシは行きますが、それを子どもが手にとって、見て、それでそこに来るという。それで、遠いところから保護者とも一緒に来てくれます。最初の感激というのは、少し信じがたいものでした。

・子を待つ親同士の交流も生まれる。地域へのつながりへのきっかけ

具体的な語り：

・基本的に、やるのは子どもだけと限らせていただいています。保護者さんは待っていてもらうという形です。そうすると、周りで待っている親同士が自然と交流しているのです。黙って自分の子だけ見ていても仕方ないので、どこの小学校とか何年生とかというので、世代間ではないですが、同世代の方が待っている間にお話しするのも、また一つ別の交流の機会になっているのかなというのは感じました。やらせてほしいという親御さんも時々いらっしゃるのですが、枚数に限りがあってというのでお断りすると、周りで座ってお話しして待っていてくれるというようなのも、交流の一つだなと思いました。世代間だと、それはきっかけであって、深く交流するというのは、どうしても同じように子どもを抱えている同世代だっ

たり、同じ年齢の子どものいるところだというのはわかっていて、そこは本当なんだろうなというのはわかっているので、そういう別の側面で、もしかしたらそれがきっかけで、同じ小学校の隣のクラスですねといったことで、きっかけができてくれたら良いと思いました。

・単一の体験（講座）ではなく複数の体験・経験へつながった

具体的な語り：

・ホールでやったのですが、防災食を作ったり、消防団から火の消し方を聞いたりと、いろいろなコーナーがつくってありました。それを次々と回って、スタンプを押す。よくできましたというので、折り紙でこまをたくさんつくっておいて、覚えてくれたのでと言って、それをおみやげにというのも考えたりしました。楽しんでいただけたのか、しっかり覚えなくても、何かのときに思い出してもらえればいいと思いました。

・高学年の小学生など参加者の幅が広い

具体的な語り：

・未就学の子にちょうど来たときに、何か実際にやるのが難しくても、お話を聞いてもらえばという気持ちで、初め声がけをしていたのですが、最近はお話のほかに工作もいろいろ教えるようになりました。そうすると、高学年ぐらいの女の子で、「このツリー、つくりたいんですけど」などと工作をやりたくて来るという子が結構多かったです。

・すでに知っていて来るというのが、すごくありがたくて。毎回、いろんな工作、工夫してきてくださいます。

・企画をきっかけに公民館にくるようになる

具体的な語り：

・お母さんたちも、家族で初めて来て、やってみましたという方が多かったと思います。何かそういうきっかけで来られるようになれば、すごくいいんだなと感じました。ほかを全然見られなかったんですけど、何かそういう一つのきっかけで、公民館に初めて来てみましたというのにはなっていたなというふうに感じました。

・子どもの楽しいというフィードバックを得られた

・多方面への広報の成果

具体的な語り：

・昨年度ぐらいから、私立幼稚園、国立学園とか桐朋とか、実際にやったときに、数名なんですけれども、来てくださいまして、そちらにはポスターを張らせていただくということを個別にお電話でお願いして、玄関とか、そういったところにポスターを張らせていただいています。今年はその成果か、国立学園の子は結構来ていたかと思います。

・スタンプラリーをつかったことで参加者が１つの経験ではなくつながりを持った経験となった

具体的な語り：

・いろんなイベントがあるので、それを満遍なく回れます。だんごになってしまわないようにできる工夫がないのかなというのと、スタンプラリーはすごくいいと思いました。スタンプラリーでスタンプを押したいがために、スタンプ埋めたいといって、もう絶対ここに来たいみたいなのがありました。だから、あれはすごくいい方法だったと思います。

・公民館にくる垣根が低くされた(物理的・機会として)

具体的な語り：

・会をやっていて、多分、南武線の谷保のほうから、こういう公民館の事業に参加されるというのは、ものすごく大変なんじゃないかなと思いましたが、全部、小学校等に広報をして、(物理的に)少し垣根が低くなったのではないかと思いました。ご報告を聞きながら、すごくいい体験で、小学生が公民館に来る、３０代のお母さんたちが公民館に来られるということで、このふれあいひろばというのが、(機会として)ものすごく垣根が低くされるという意味で、とても意義ある事業ではないかというふうに、私は参加させてもらって、思っています。

・脳がリフレッシュされる

具体的な語り：

・ふだん、孫はいますが、若いお母さんと接したり、子どもたちと接するという機会は、あまりに少ないために、私たちにとっても、脳がリフレッシュされるような体験だったように思います。

・参加者同士(子どもたち同士)のまなび

具体的な語り：

・学年差で、体力で、かるた取りなどは、どうしても小さい子がなかなかとれないというのもあったりしました。ああいうところでも、それが社会だからしようがないのかなと、そういう社会勉強なのかなとも思ったけれど、子どもの社会というのが少しかいま見えた側面はありました。

　小学生の中でも、学年によって世代に違いがあるので、初めて違う学年の子と真剣勝負でかるた取りするなんて、兄弟少なくなってくると、あまり機会はないでしょうから、いい経験になったのではないか、譲っているお兄さんお姉さんもいたりするので、ふだん児童館とか行かない子にとっては、いい経験になったのではないかと思います。

・講座に参加していなかった人の学び(地域としての課題)

具体的な語り：

・私も実は子どもが小さい頃に、利用するときに「公民館は子どもが利用する施設ではありません」と言われたことがありました。子どもが３年生まで学童保育があるのだけれども、４年生からなくなるので、夏休みに本当に居場所がなくて、どうしようということで公民館の部屋を借りて、「まち・環境ワークショップ」という活動を企画した時のことでした。その時、結局大人と一緒であれば使えるということになりましたが、急にここ数年で、公民館の子どもの受け入れ方が変わってきたということをすごく感じました。

⑤　今後の課題や大切にしたいこと

・単発の企画に参加した若い父兄をどう公民館の事業・講座に参加してもらうか

具体的な語り：

・小さいお子さんとか、父兄の方も一緒にいらっしゃるので、一緒に周りで見ててくださいます。父兄の方といっても若い人たちで、そういう人たちで公民館に初めて来たとかいう方も、興味を持っていただいて、ほかの講座にもとか、そういうふうなのにつながっていただけるといいです。

・スムーズな人の流れと学びの流れ(滞らず流れるように)

具体的な語り：

・ここがあいていますとかってやっても、紙版画しに来たんですと言われたら、はい、どうぞと。それが作りたいんですといったら、もうそこに入れるしかないので、そういう形でやっていました。でも、何か工夫ができるといいんですよね。走り回って、全部あいているところをチェックしながらよりは、何かうまいことできるといいかもしれません。

・ひとりひとりをカバーするのは難しい（現場対応について）

具体的な語り

・確かに１人で来る子はいました。それで、何々やりたいですと言って来ます。後から親御さんは来ているのかもしれないのですけど、１人で受け付けされる子はいます。何か工作とかだと、そういう場に入ってしまうと、黙々と１人でつくるので、わあっとみんなで遊ぶものは、多少そういう目配りは必要なのかもしれないです。どうしても、けがとかそうしたことばかりに気を使ってしまって、一人一人のところを見られていません。

・子どもが中心になって企画する子ども実行委員

具体的な語り：

・お客さんとして子どもが行くというのではなくて、子どもが２週間ぐらい前から一生懸命、放課後とかに作って、仲間たちと相談しながらやった達成感というのが、すごくあったような気がします。

・自分たちの公民館となる仕組み(積極的に参加できる仕組み)

具体的な語り：

・子どももお客さんではなくて、子どももかかわってくるというものが育つと、中学、高校となって、公民館に長くかかわります。自分たちの公民館という感じの、子どもをどこまで受け入れるかという公民館の考え方が、どこまで今、来ているかわからないので、少しやり過ぎという話もあります。それは児童館の仕事ではないかというのもあるかもしれないのですが。

・お父さんが来るようになる公民館

具体的な語り：

・お母さんと来るとか友達と来るとかというのは、今までもあったのですが、お父さんの参加がすごく前回は目立ったので、少し突破口かと思います。それをきっかけに公民館に来てくださるといいなと思います。

・時代にあった講座づくり
具体的な語り：
・子どもたちにとっては、我々の時代と違っていて、知らなくてもいいでは済まされないことも多いので、そういうことを入れていかないと、１０年後あるいは１５年後にその子たちが公民館へ帰ってくるときに、自分の当てはまる講座がないことにならないかというのは、少し心配です。

・一歩踏み出そうとしている市民に対する対応(職員さんの丁寧な対応・思いを知る)

・外から見える工夫、見えるための工夫(ハード面の工夫)

⑥ みなさんとふりかえって考えたいこと
・気軽に見学できる工夫(札をさげる)
具体的な語り：
・日ごろ活動しているグループの間で、気になっているグループとかがあって、見に行きたいことはありませんか。そういうグループをもう少しオープンに、やっている活動の場を見に行ける機会があってもいいかなと思いました。どうぞ見てくださいというときは、その札をかけておくというのを普通にしてはどうでしょうか。
　どこのグループが使っていますというのを来た人誰でもが分かるように書いているグループはすごく少ないので、そういうのを書くとか、どうぞお入りくださいというようなことを書くとかして、それをずっと続けたほうが、誰もが公民館に来た時にいいのではないでしょうか。

・日々の多世代交流の仕掛けをどうつくるか
具体的な語り：
・ほかにももっと日々の中で、交流する方法、何か仕組みのようなものが作れるのではないかと思っています。

・これまで公民館の利用者として子どもが想定されてこなかった側面もあったが、この世代間交流事業をきっかけに、公民館を継続的に利用する親子も見られるようになった。最近は、子連れの父親の参加や、他の講座でも若い男性が増える傾向にある。
・公民館を頻繁に利用する人たちと、新しい人たちとの交流もできると良い。

・今回のふりかえる会では、参加した子ども・親が出席できず残念だった。今後は、企画の段階から子どもが積極的に関われるものを立ち上げてはどうか。

・子どもからシルバー世代に伝える、教える講座
具体的な語り：
・子どもから大人へ伝える。シルバーから伝えることも沢山あるのかもしれませんが、時代の進み方が速いので、子どもも沢山伝えることがあるのではないでしょうか。

・対象限定ではなく公開講座(大人も子ども参加)という形での実施

具体的な語り：

・子ども限定ではなくても、公開講座という形では何か考えられないでしょうか。例えば大人も子どもも一緒にできるというものがあるといいと思います。

以上のように分類を行ない、語りにラベリングを行なったが以下のような課題が委員内において出された。

・複数項目にまたぐ語りもあり、判断が難しい。しかしその一方で、豊かな語り、豊かな実践がされていることを確認することができた。

・ふりかえる会には大人が多く、子ども・若者世代の参加はなかった。企画に参加した若い世代の声を聞くことができるようにふりかえる会そのものの情報提供のあり方、運営のあり方への工夫が必要であることを確認した。

・講座外の日常的な時間において公民館に気軽に足を踏み入れてもらうためのひとつのきっかけとしてふれあいひろば（世代間交流事業）が役割を果たしていることを確認できた。しかし、ヘビーユーザーとライトユーザーとの交流は十分ではないため、利用頻度が違うもの同士の交流においても仕掛けを作ることが重要であると考える一方で具体的な方策にまで議論が及ばなかった。

（３）Ｃグループ 認知症とともに生きる ―認知症映画会の取り組み―
（担当委員　今村和義、龍野瑶子、富田和枝、深川彌生）

参加者：１２名（市民６、公運審委員４、職員２）。うち講座参加者８、実行委員３

① 公民館事業全体の中の位置づけ
② なぜ、この講座をおこなったか。（目的・経緯）
③ どんな講座だったのか？（内容・展開）
④ どんな成果や学びにつなげられたか？
⑤ 今後の課題や大切にしたいこと
⑥ みなさんとふりかえって考えたいこと

①②③公民館事業全体の中の位置づけ、目的・経緯、内容・展開
――テーマが認知症ゆえに、講座の展開の特異性

・まずは認知症を理解したり、認知症になってしまっている状況を知るのには、講師の話だけだと見えにくいかと思ったので、映画みたいなメディアを使ってやってはどうかという発想が最初だった。やってみたら、悩みとか自分が経験してきたこととかを話したい、そういう場を求めているという声が参加者のほうから出てきた。それをつくるとなったときに、どうしても職員１人、２人の担当で組織するのは難しかったので、いろいろな方にご協力いただきながら今に至ってきた。（職員）

・高齢者問題の講座として、認知症は市民が広く関心を寄せるものなので、そこに焦点化したのはよかった。事業全体の中で、特に今日的な重要なテーマでやってくれたと思う。だからこそ、職員だけでは担い切れない、市民のほうが実際に知っている面が参加者の中から出てきたのだと思う。それで実行委員会もできるし、参加者が互いに話し合おうとか、実際に介護をやっている市民に話を聞こうという、非常に身近な取り組みとなっていった。講座自体に変化があるし、公民館の事業としてとてもいい展開をしていると思う。（実行委員）

・担当職員の１人も介護の当事者ではあるが、私自身はまだ直面していないから、やっぱり皆さんの知識とか、当事者でかかわっている方の意見がないと、なかなか企画がうまくいかなかったというのも本音。最初『妻の病』という映画をやったときに映画監督と学者を呼んできてトークセッションをした。それはそれで社会的な位置づけを聞くという意味ではよかったが、聞くだけじゃなくてもっと話し合いを入れようという声をいただいたのは、すごく大事なきっかけになった気はする。今後どうなるか、常に変わっているから、まだわからない。その分、実行委員会の会議とか、終わった後の振り返りの場とか、かなりの回数の会議を重ねてはいる。（職員）

●④⑤どんな成果や学びにつなげられたか――はっきりと現れた学びからの成果、課題の確認

・学びという点では非常に大きくつながったという印象を持っている。例えば、２番目の映画で、「認知症は９５％が正常で５％が認知症の影響が出ている」とあったのを、アンケートで何人もの方が「びっくりしました」「認識が変わりました」と書いているのが印象的だった。通常の講演の学びとは違う、映画を使った効果だったと思う。１００人以上参加しており、認知症は自分には全然関係ないという

方も大分来ていたので、映画とか多様な手法を使っていくのは効果がある。（実行委員）
・私も介護を経験したが、自分が知識を持って接するのと、そうじゃないのとは、こんな差があったんだと思った。向き合うしかないなと思ったときに、腹がすわる。（講座参加者）
・高齢化していけば、当たり前にぼけていく、認知症になっていく。ただ、それをみんなして大騒ぎして不安がっているというのが、今の現実。認知症を知るこういう会があることが必要。自分は妻が認知症になって悩みに悩んだ結果、この講座で実行委員として参加し、また、いろんなサークルがあるんだと知り、おつき合いをさせてもらっている。おかげで、自分自身が育っているという状態。あのままなら、定年退職して家で閉じこもってテレビ見ているだけだった。介護孤独にならないためにいろんな人と知り合いになったり、経験者とも話をしようというふうに、前向きに半歩踏み出せた。そのために、公民館などでこういうことをしているよというのが、一番いい引き金。本人が自立して行動するための引き金になってくれる。（実行委員）
・私は仕事の関係でこの講座には参加できなかったが、かわりに第４回に母が参加した。うちの母は元看護師で、娘の私は母の話を聞いて、ふりかえる会に参加した。高齢の方の話がたくさん参加されたようだが、ヤングケアラーのことも常日頃気になっている。高齢者の問題というだけでなく、若い人たちがケアしていたり、親族との関係性に悩んでいたりする。なかなかそういう悩みは周囲に理解してもらえないだろうと思うと話すのが難しい。話せる機会を増やすことを公民館でもやってもらいたい。
・認知症を理解する、それで、そのことを抱えている方がつながっていく、つながっていくことによって高まっていく。そういう意味で、この講座がいい働きをしているというのがわかる。ただ、介護の問題を考えるときに、公民館としては、市民が介護を支える仕組みを考えていくという場としても機能していかなくちゃいけないんじゃないかなと思う。こういう方向で充実することで、介護をしている人も、もちろん当事者の人にとっても、もっと過ごしやすくなるんじゃないかという方面にも視点を向けて企画してもらえたらいいと思う。
・一言で認知症と言うけれども、その人の人生があって、親子関係があって、人それぞれで、仕組みのつくりようがないのかと思う。仕組みをつくるにしても、介護の何かということと、老いると認知症になってしまうというのはどういうことなのかというのを、それぞれの人が把握してないと、何が欲しいかがわからない。例えば、在宅じゃなくて、自分に一番適した施設があればそこのほうがよかったとかいう場合もある。だから、仕組みをつくるにも、その前段階というか、まだ私たちが熟してないのかなと、今は思っている。（実行委員）
・成果や学びを端的に表現するのは難しいが、認知症は誰もがなる可能性のある病でもあって、にもかかわらず、偏見や誤った理解がある。まずはそういう認識とか、介護は何もかも世話するものだとか苦痛だけしかないとかではなくて、その人と向き合うという意味では変わらない関係性というのが大事なんだという話とか、認識の転換とか介護観を見直すという部分が大きかったと思う。もちろん、派生していろいろな課題、例えば介護体験を語る会では、ヤングケアラーの方の祖母をずっと介護してきて介護離職してしまった話が出たり、小規模多機能の施設がすごくよかったと施設サービスについてかなり詳しく経験談を語ってくれたりした。そういう具体的な話は出ているが、まだまとまった成果として学びが深まったという段階には至っておらず、次の課題なのかと認識している。やはり、市役所がやるとどうしても制度ありきで事業が組み立てられるが、公民館がやるということで、その制度の問題点などを含めてどういう課題があるかとか、どういうサービスを私たちは求めるのかとい

うふうに考えていけるといいのかと思う。（職員）
・公民館でふだん講演とか読書会とかいったいろんな活動で話しているのと同じ地平で認知症を、あるいはそもそも老いるということと認知症ってどういう関係があるのかということなどを語れる場があることは、貴重だなと思っている。（実行委員）
・よく友達たちと、自分もいずれこういう老いになるってことを思ったら、ちょっとでも学んだほうが楽よと話す。知らなかったことを学ぶということの尊さは、幾つ年をとっても変わらないんだなと思う。その謙虚な気持ちが、結局、自分が老いたときも身内が老いたときも、うろたえないで対応できる一つの力になると私は思う。
・自分が認知症になっても認めなくない、家族も周りに知られたくないというのがまだ現実にある。認めてもいいんだという環境づくりが大事で、公民館がこういうことをやることは非常に有意義。認知症は最初の一歩が大事だなと思っているので、広めていく必要があると思う。と同時に、この実行委員会のよさは、過去に介護を経験した人や実際にやっている人、それから心配のある人が集まって、じゃあどうしていこうかと、模索しながら新しいものを生んでいて、会議自体が生きている。（実行委員）

●⑥みなさんとふりかえって考えたいこと
――市民の声を職員がうまく吸収して次の事業につなげていくために、何ができるか
・もちろん職員は勉強しながらいろんな講座にかかわっていくが、それだけだとどうしても限界があって、市民が今抱えている課題とか悩みとか思いとか、あるいは制度や仕組みのどこに使いにくさや問題があるのかということなどを、どうやってアンテナを張りながらいろいろな人の声を聞いて、どうやってそれを講座の企画に生かしていくのかというのは大事。認知症講座はたまたま実行委員会形式になって、強力なメンバーと議論しながらやっている。必ずしもそういうふうに展開する講座ばかりではないので、いろいろなあり方が追求されたほうがいいかと思っている。（職員）
・他市の友達に聞くと、「職員が全然聞いてくれない」と言っていた。「わあ、国立は違うわ」と思った。職員が一生懸命勉強して、今何が必要とされているかのキャッチングが早い。
・公民館で刺激を与えてもらい、自分の身近な地域の中で自分ができることは何かと考えるきっかけをつくってもらっているのがありがたい。私は団地の自治会で小さな学習会をやったり、自分の子どものＰＴＡをやったりとかいろいろなことをしながら、地域に生きてきたのがよかったと思う。
・市民が主体でいろいろな広がりとか、コラボレーションが広がっていったらおもしろいと思う。仕組みの問題などは、職員の方は感知してないかもしれないけれども、私は実行委員からたくさんそういう話を伺っているので、公民館の事業で議論が活発になることによって、実態としては、具体的な仕組みについてはかなり生活に役立っているという実感がある。（実行委員）
――新たな課題の提示
・介護していく上で、行政の制度というのは大きな役割があるわけだから、市民にとってより役に立つ、あるいは使い勝手のいいものをつくっていく視点を市民自身が持っていけるような勉強とか考える場を公民館が設けてくれるといい。国は遠いけれども国立市は近いわけだから、そこの制度に反映させていくという回路は、公民館で考えたり学んだりすることから形が見えてくるのではないかと思う。
・この講座に地域包括センターの職員もずっと参加している。だが、こういう制度がありますよと案

内はしてくれるけれども、それが皆さんの要望にそんなにぴったり応えられないというのは、もう職員の方もわかっているようだ。（実行委員）
・その、ぴったり合わないという現状があって、それは国の制度に制約があるのか、国立市独自でそれをちょっと修正していくことのできる素地があるのかとか、そういうことも考えていけるかと思う。
・今、実行委で議論に出てきていることだが、参加者の話し合いや交流の時間ではかなり具体的な話になっている。例えば、認知症の服薬についてどう考えるかという問題とか、あるいは施設のサービスについて、なかなか行政はこっちがよくてこっちが悪いですなどと言えないので、それこそ市民目線で、私たちはどういう介護サービスを求めているのか、あるいは介護の専門職にどうあってほしいのかというような議論も実は結構出ている。これは多分、行政だと確かにやりにくいんで、市民主催のこういう公民館での学習活動なんかにある意味期待されているところだと思う。あるいは、市民自身がいろいろなサロン活動をやったりする中で、ニーズを捉えている人がいて、そういう活動をどう広げていくかということなども出ている。今は、高齢者支援課の職員と交流している時間に一緒に参加してもらうというレベルで来てもらっているが、仕組みとか制度の話になると、やはり行政を巻き込んでいく議論があるべきなのかと思う。全部一遍にもちろんできないので、少しずつ、実行委員会で議論を積み重ねて、開かれた場を作っていくことが課題かと思う。（職員）
・私が最近感じるのは、たとえば市報の記事に載るのが、つい二、三年前まではお年寄りのことが大分多かったが、今はほとんど子どもさんのことということ。どうなったんだろうと少し不安は感じる。
・認知症を理解するって言っても、介護される人に介護する側がどう対応するかという知識とか理解の深さとかを見つけるだけで解決する問題なのかどうか。社会とか地域とか全体が共通の理解というものを持たないとならないのではと思う。例えば、単身世帯という問題とか、介護する側の悩みとか問題だけではとどまらない性格の問題が出てくるから、仕組みの問題っていうのは、対人関係とか当事者責任でカバーできない範囲のものをすくい上げたものでなくてはいけないのではないかと思う。

（４）Ｄグループ「文教都市くにたち」市制施行 50 周年記念事業
（担当委員　大串隆吉、大井利雄、高木裕子、間瀬英一郎）

ふりかえる会Ｄグループ参加者：9 名（市民 4 名、ほかは職員・公運審委員）。
※9 名中、市制 50 周年事業の参加者は 4 名。

① 「公民館事業全体の中の位置づけ」に係る意見
・(公民館事業の柱の一つである)「まちを知る、地域から学ぶ」に位置づけられるのか？
・(公民館の周年事業ではなく）市制執行 50 周年事業を何のために公民館がやるのか？

② 「なぜ、この講座をおこなったか。(目的・経緯)」に係る意見
・(定員に若者枠があったが）若者を重視しなければいけないのか？
・高校生、大学生、社会人になったときに、ちょっとでも将来に希望が持てるようにと伝えたかった（企画意図)。
・50 周年事業だからこそ、この規模（著名な登壇者、芸小ホールのサイズ）でできた。
・これまで公民館に来たことがなかった人にも、できるだけ来て聞いてほしい、という想いがあった。

③ 「どんな講座だったのか？（内容・展開)」に係る意見
・企画、広報、実施、記録まで一連の流れが理想状態（の事業）だった。
・広報の仕方として、意識して目立つようにした（広報意図)。
・若者枠を別枠で用意したのはよかった。
・若者枠の定員割れは残念だった。
・(登壇者）お二人とも、将来のメッセージということで力強いことを言ってくれた。
・次世代に向けてのメッセージという割に、高齢者が多かった（若者に届かず残念)。
・昔話（登壇者の国立の思い出）に会場にいた参加者（高齢者中心）が盛り上がった。

④ 「どんな成果や学びにつなげられたか？」に係る意見
・若者の参加人数は少なかったものの、若者のアンケート回答率（関心）は高かった。
・社会で生きる（ための）コミュニケーションの中で、相手の話を聞くことの大切さを伝えてくれた。
・(登壇者の京大総長の）山極さんのメッセージ「行動（が大事)。動け」に感動した。

⑤ 「今後の課題や大切にしたいこと」に係る意見
・企画から参加者の声までを小冊子でまとめるとよい。
・若者しか質問できなかった。

・時間が限られ参加者も多い中、挙手による質問はコントロールが難しいと判断した。
・質疑のやりかたをもっと工夫できた（質疑のやりかたに無駄があったので）。
・参加者の質問する力やリテラシーを高める講座があるとよい。
・公民館は次の世代（若者）を目指さなければいけないと思う。
・若者向けの仕掛けが必要。

⑥ 「みなさんとふりかえって考えたいこと」に係る意見

担当職員（高下さん）から提案のあった「みなさんとふりかえって考えたいこと」

⑴ 若い世代はこのような講演会の機会を求めているのか？

⑵ 若い世代に学問の面白さを伝えるためにはどのような事業が考えられるか？

・（社会の）現実を見るという講座をやったらどうか？（学校では絶対にやらないから）
・現実の地域社会で大人たちがどのように生きているのか、生活しているのかを捉える体験をしていくことが（学生にとって）知的意欲の刺激になる。
・公民館が親とつながれば、子どもたちも公民館に入りやすくなる。
・求めているもの（講座）をやれば、（若者を含めて誰でも）参加する気になるもの。

⑦ その他の意見

・（当初に受けた印象は）50 周年（記念事業）だからお祭り的イベントなのかと思った。
・（登壇者の人選について）国立の中で 50 年間生きてきた人の話を聞きたかった。
・（50 周年と国立出身の登壇者二人の学長就任が揃った）貴重なタイミングだった。
・親が子どもと一緒に行きたい、連れていきたいと思う企画だった。